

2004 年度の演奏曲目展望

大村 恵美子

数年前に企画し、2003 年から始められた、作品番号順に 50 曲ごと区切った中から選曲する、4 年にわたる定期演奏会プログラムは、その第 1 年の 4 曲を終え、12 月 7 日第 94 回定演の 1 曲 (BWV40) を余すのみとなった。合唱団では、ひきつづき第 2 年度 (2004 年) の計画を検討し、練習にすでにとりかかっている。

- ・第 1 年度 (2003 年, BWV1-50) “地なるいのち”
- ・第 2 年度 (2004 年, BWV51-100) “野の花 空の鳥”

それぞれの曲名と作曲初演年代をあげると：

BWV1-50 より (2003 年度)

- BWV1 「あしたに輝く たえなる星よ」(1725)
- BWV26 「はかなくむなしき 地なるいのち」(1724)
- BWV30 「よるこべ 救われし民」(1738)
- BWV40 「地に來ませり 神のみ子」(1723)
- BWV47 「おのれを高むる者は 低くせられ」(1726)

BWV51-100 より (2004 年度)

- BWV72 「みなすべて み心のまに」(1726)
- BWV77 「主を愛すべし 心のかぎり」(1723)
- BWV78 「イエス わが心を」(1724)
- BWV93 「ただ主に よりたのみ」(1724)
- BWV99 「神の御業こそ ことごと善けれ」(1724)

2004 年度の定期演奏会プログラムとしては、次のように上演される。

- ・第 95 回定期演奏会 (2004 年 5 月 9 日)
 - 演奏会タイトル “野の花 空の鳥”
 - BWV93 「ただ主に よりたのみ」
 - BWV99 「神の御業こそ ことごと善けれ」
 - BWV77 「主を愛すべし 心のかぎり」
 - BWV78 「イエス わが心を」
 - BWV228 モテット 「恐るな われ なれと共にあり」
- ・第 96 回定期演奏会 (2004 年 12 月 予定)
 - “バッハのクリスマス音楽”
 - BWV72 「みなすべて み心のまに」
 - BWV248 《クリスマス・オラトリオ》

第 95 回定期演奏会プログラム

第 95, 96 回の定期演奏会にとりあげる 5 つのカンタータは、1723 年から 1726 年にかけて、いずれもバッハのライプツィヒ着任後間もなくの、意欲に溢れた作品群に属する。12 月に上演予定の BWV72 をのぞく 4 曲は、教会暦上、三位一体節後の 7~9 月の通常礼拝のためのもので、特別行事の色彩をもたない。信徒たちの、日常生活の指針となるような、親しみ深い福音書章句から主題が選ばれている。

BWV72 (顕現節後 第 3 日曜日)

マタイ 8 : 1-13, 百人隊長のしもべの癒し

BWV77 (三位一体節後 第 13 日曜日)

ルカ 10 : 23-37, 慈悲深いサマリア人

BWV78 (“ 第 14 日曜日)

ルカ 11 : 11-19, イエスのらい病人の癒し

BWV93 (“ 第 5 日曜日)

ルカ 5 : 1-11, ペテロの大漁

BWV99 (“ 第 15 日曜日)

マタイ 6 : 24-34, 衣食を思わず神の国を求めよ

第 95 回定期演奏会の前半に演奏される 2 つのカンタータについては、今月号で、後半の 2 つのカンタータとモテットについては、2004 年 1, 2 月号でご紹介することにしてしよう。

カンタータ第 93 番

「ただ主に よりたのみ」

„Wer nur den lieben Gott läßt walten“ BWV93

第 95 回定期演奏会前半の 2 曲は、代表的なドイツ・コラールを基にした典型的なコラール・カンタータである。(両コラールとも、わが国の讃美歌に早くから採り入れられ、親しく歌い継がれている。)

・BWV93 の基本コラール：

G. ノイマルク 「ただ主に よりたのみ」

(Georg Neumark „Wer nur den lieben Gott läßt walten“ 1657)

『讃美歌 21』 #454 「愛する神にのみ 依り頼むものは」

・BWV99 の基本コラール：

S. ローディガスト 「神の御業こそ ことごと善けれ」

表1:カンタータ BWV98, BWV99, BWV100「神の御業こそ ことごと善けれ」() () ()の比較
基本コラール:Rodigast 1674

	基本コラールとの関連	楽器編成	教会暦 / 福音書による主題
BWV99 (1724)	冒頭合唱 (= 第1節) 最終コラール (= 第6節) 分類:コラール・カンタータ	ホルネット,フルート, オーボエ・ダモーレ 弦・通奏低音	三位一体節後第15日曜日 衣食のことを思わず,神の国と神の義を 求めよ(マタイ6:24-34)
BWV98 (1726)	冒頭合唱 (= 第1節)のみ (最終曲はアリア)	オーボエ2, オーボエ・ダカッチャ 弦・通奏低音	三位一体節後第21日曜日 王の役人の息子の奇蹟的治癒(ヨハネ4: 46-54)
BWV100 (1734?)	全6曲 (= 全6節) 分類:全詩節カンタータ (冒頭合唱 = BWV99-1) (最終合唱 = BWV75-7)	ホルン2,ティンパニ, フルート,オーボエ・ダモーレ 弦・通奏低音	教会暦用途不詳 聖書章句は不明だが,「神への信頼」を歌 うコラールを貫く

(Samuel Rodigast „Was Gott tut, das ist wohlgetan“
1674), Severus Gastorius 曲
『讚美歌 21』#527「み神のみわざは すべて正しい」

初演:1724年7月9日(三位一体節後第5日曜日),
ライプツィヒ。

カンタータ第93番の福音書章句(ルカ5:1-11)は,
ゲネサレト湖畔のイエスとシモン・ペテロとの対話か
ら,物語が始まる。夜通しの努力にもかかわらず不漁
だったシモンたちが,イエスの言葉どおりに再び湖で
網をおろすと,舟が沈みそうなほどの大漁となった。
シモンは驚いて,「主よ,わたしから離れてください。
わたしは罪深い者なのです」と言う。それに対するイ
エスの言葉:「恐れることはない。今からのち,あなた
は人間をとる漁師になる」にこたえて,シモンらはすべ
てを捨ててイエスに従ったのである。

ここには,イエスの呼びかけと,それに対する躊躇
- 決断 - 信頼と服従の原点がある。カンタータ歌詞の
中では,5)テノール・レチタティーヴォで,次のよう
に歌われる。

夜もすがら ペテロ / むなしく漁(すなど)り / な
にも得ず / 主に従いて / 多くを得たり。

基本コラールがそのまま当カンタータの歌詞とし
て用いられているのは,1)合唱(コラール第1節),4)
二重唱(第4節),7)最終コラール(第7節)で,中
間の第2,3,5,6曲にも,コラールの第2,3,5,6節のテ
クストがそれぞれ部分的に散りばめられて,自由詩(作
者不詳)とたくみに組み合わせられている。

1. 合唱

8分の12拍子のリズムに乗って,フレーズごとに女
声2部,男声2部,ついで混声4部の装飾的な導入か
ら,4声体コラールが引きつがれる。オーボエ2,弦・
通奏低音を伴って,16分音符の絶え間ない流れの上に,
コラールが力強く展開する。

2. レチタティーヴォとコラール(バス)

2)と5)とは,共通した手法による。コラール旋律
の原型をとどめたアダージョの部分と,セッコ・レチタ

ティーヴォの部分とが交替して現われ,人生の重荷を
主にゆだねるように勧め,諭す。

3. アリア(テノール)

長調・3拍子の軽やかな調子に転じて,悩みのとき
にも静かに救いを信じようと歌う。3)4)ともに弦合
奏のみ。

4. 二重唱(ソプラノ・アルト)

コラール第4節の歌詞全体を,女声2部で追いか
け合うように歌い継ぐ。弦が斉奏で,コラールの主旋律
を1フレーズごとに間をおいて奏でる。私たちの真情
を主に認められるとき,それは豊かな賜物で報いられ
るだろう。

5. レチタティーヴォとコラール(テノール)

2)と同様,ここでもコラール旋律の原型によるア
ダージョ部分と,セッコ・レチタティーヴォとが交替して,
複雑な内容を展開する。まず,悪天候にも主はわれら
を見棄てない。一方,この世に平穩をむさぼる者には,
ものみな遷(うつ)ろう。不漁のペテロに主が現われ
て大漁となったときのように,ただ信じて待ち望めば,
すべてに終りあり,雨のち晴れなん。

6. アリア(ソプラノ)

5)の内容を引きついで,富めるを貧しく,貧しきを
富ませ,意のままに導く主を仰ぎ望んで,日々従いゆ
こう,と歌う。オーボエとソプラノとで,主に従いゆ
く足取りを,上向音型でくり返し表現する。

7. コラール

基本コラール第7節全体の提示で,神への信頼を歌
い尽くして終る。昔から今に至るまで,世界中の教会
で愛唱されているコラールにふさわしく,親密な味わ
いのあるカンタータである。

初演から2年後の1726年7月21日(同じく三位一
体節後第5日曜日)にも,「ペテロの大漁」という主題
で,バッハはBWV88「見よ われ漁る者を遣わし」とい
う,正面からこの主題に取り組むカンタータを作った。
このときの最終コラールも,このBWV93と同一のもの
で,他は独唱中心に,福音書章句により密接な展開を
見せる。これら2つのカンタータは,姉妹作品とも考
えられよう。

表2: カンタータ BWV99, BWV100 のコラール引用の比較

基本コラール: Rodigast 1674

BWV99 = コラール・カンタータ		BWV100 = 全詩節カンタータ	
1) 合唱	= コラール第 1 節	1) 合唱	= コラール第 1 節 (= BWV99-1)
2) レチタティーヴォ(B)	コラール第 2 節 書換え	2) 二重唱(A・T)	= コラール第 2 節
3) アリア(T)	コラール第 3 節 "	3) アリア(S)	= コラール第 3 節
4) レチタティーヴォ(A)	コラール第 4, 5 節 "	4) アリア(B)	= コラール第 4 節
5) 二重唱(S・A)	自由詩	5) アリア(A)	= コラール第 5 節
6) コラール	= コラール第 6 節	6) 合唱	= コラール第 6 節 (= BWV75-7)

カンタータ第 99 番
「神の御業こそ ことごと善けれ」
 „Was Gott tut, das ist wohlgetan“ BWV99

BWV98, BWV99, BWV100 の 3 つの作品は、同じコラールに基づく同名のカンタータだが、それぞれに異なった成立と特徴をもっている。順序としては、BWV99 が最初に作られ、その後 BWV98 BWV100 の順に作られた。BWV98 は、冒頭合唱以外は、このコラールに基づく曲はないので「コラール・カンタータ」とは言えないが、BWV99, BWV100 との関連で言及している。(表1)

1. BWV99...初演：1724 年 9 月 17 日 (三位一体節 後第 15 日曜日)
2. BWV98...初演：1726 年 11 月 10 日 (三位一体節 後第 21 日曜日)
3. BWV100...初演：1734 年? (用途不明)

いずれもライブツィヒ初演。BWV99 は、着任早々のバッハが気を入れて追求した、一連の「コラール・カンタータ」に属する代表的な作品だが、その 10 年後に初演されたとされる BWV100 は、「全詩節カンタータ」(コラール全節をそのまま歌詞として用いたカンタータ)としての、作品の形式上の完成を意図して作られたもののように思われる。前 2 曲が木管楽器で彩りを添えた室内楽的な作品であるのに比して、BWV100 は、ホルン 2 とティンパニを加えて、祝典的な用途が想像される。

ちなみに、この BWV100 のように、「全詩節カンタータ」として完成された作品は、最初期の BWV4 に始まって、10 曲ほどが残されている。

1. BWV4「キリスト 死に繋がれしが」(1708 前)
2. BWV97「わが全ての業 主に導かる」(1734)
3. BWV100「神の御業こそ ことごと善けれ」(1734?)
4. BWV107「なんぞ悲しむや おおわが心」(1724)
5. BWV112「主はわが頼める まことの牧人」(1731)
6. BWV117「み栄えあれかし 恵みのみ父に」(1728-31)
7. BWV129「ほめ讃えよ 神 わが光」(1726/27)
8. BWV137「頌めよ主を 強き栄えの君を」(1725)

9. BWV177「呼びまつる イエスよ」(1732)
10. BWV192「いざや讃えん 心とわざもて」(1730)

これら 10 曲とも、バッハの愛したコラールに基づくものだが、とくに BWV100 のコラール („Was Gott tut, das ist wohlgetan“ S. Rodigast 1674) からは、バッハは 3 つのカンタータの他にも 3 つの婚礼用コラール、オルガン前奏曲なども作っており、歌詞内容もさることながら、その旋律構造の活発な動きから、大いに意欲を促されたものではないかと思われるのである。

BWV99 の福音書章句は、イエスの福音の言葉として、とびきり美しく、有名なマタイ 6: 24-34 で、とくに次のくだりは、神への信頼を呼びさます比喩として、私たちに親しいものである。「空の鳥を見よ... 野の花を思え...、栄華を極めたときのソロモンでさえこの花の一つほどにも着飾ってはいなかった...何を食べ、何を飲み、何を着ようかと思ひ悩むな。」

この鳥と花の譬えは、BWV98, 99, 100 の 3 つのカンタータを通して、歌詞そのものとしては、残念ながら 1 回も現われない。しかし、一般にひろく愛され、イエスの教えの核心をよく表していると思えるので、今回は 第 95 回定期演奏会全体のプログラムのタイトルとして用いることとした。

BWV99 だけでなく、この定期演奏会で演奏される BWV77, 78, 93 も、それぞれに異なった福音書の物語を歌詞としてはいるが、4 曲ともすべて、内容としては「野の花 空の鳥」で一瞬にイメージを広げられるような“神と人との信頼関係こそ信仰の核心”をテーマとする変奏曲ともなっているからである。

BWV99 と、その 10 年後の BWV100 とを比較することも長くなるので、ここでは構造上の違いだけを挙げておくことにしよう。(表2)

BWV99 は、基本コラール (Rodigast 1674) の中間詩節 (第 2~5 節) の内容が、レチタティーヴォやアリアの中にたくみに組み込まれている。それに比して、BWV100 は、全詩節をそのまま歌詞として活かしたため、6 曲ともすべて 神の御業こそ... と同じフレーズで始まり、冒頭と最終の合唱にはさまれた 4 曲には、レチタティーヴォがなく、すべてアリアとなっている。

【BWV99 解説】

1. 合唱

フルート、オーボエ・ダモーレ、弦合奏との明るい協奏曲風な展開の上に、コルネットでコラル旋律を補強された4声体コラルが、1フレーズごと簡素な装飾をほどこされて歌われる。「世はすべてこともなし」(“All's right with the world!” R.Browning)といった趣きの、生き生きと澄んで安定した、神統治の讃歌である。コラル第1節。

2. レチタティーヴォ(バス)

神に道をゆだねる者に、災いを去らせたもうという最後のくだりが、アリオーゾとなって、コラル第2節の心を歌う。

3. アリア(テノール)

第3節の特徴は、良き医師である主が、毒ならず薬もて私を救ってくださる、というアイディアである。フルートのオブリガートが、32分音符をくり返しながら、神の生き生きとした働きかけを浮かびあがらせる。

4. レチタティーヴォ(アルト)

アルトによるこのレチタティーヴォは、次の二重唱への導入となり、悩みに耐えて泣きつくしたのち救いの時きたりから、5)の重荷耐えずして投げ出す者は喜びを迎えることあたわずへと引きつがれる。

5. 二重唱(ソプラノ・アルト)

苦き盃われ受くとも 耐え忍び、やがて心に受くるは甘き慰め 消え去らん すべての痛み という第5節本来の趣旨から遠く離れず、艱難の時にも神の御業は果たさる という励ましを、ソプラノとアルトが、フレーズをくり返すごとに、だんだんと音域を高めてゆき、途中でくじけて重荷を投げ出すものには、喜びを迎えることはできない、という警告で終る。

6. コラル

同名の3曲のカンタータのうち、最終コラルが単純な4声体で堂々と歌われるのは、このBWV99だけである。BWV98はヴァイオリンのオブリガートを伴ったバス・アリアで終るし、BWV100は華々しい器楽演奏ときのコラル合唱曲となっている。

室内楽曲的なBWV98、正統的なコラル・カンタータの風格を示すBWV99、全詩節カンタータとなって大規模かつ構成美をきわめるBWV100と、同じ素材から3様のアイディアで設計されたこれらの3つのカンタータは、バッハの威力を集中的に証しするものである。

ぜひお出かけください

- 東京バッハ合唱団第94回定期演奏会 -

“バッハのクリスマス音楽”

カンタータ第40番(地に來ませり 神のみ子)
クリスマス・オラトリオ 第4部、第5部、第6部
石橋メモリアルホール
12月7日(日)、午後4時開演

傘寿を祝われた横河マリ子様

大村 恵美子



2003年10月25日、高輪プリンスホテル貴賓館で、横河マリ子様(合唱団後援会員)の門下生コンサートがありました。毎年ご本人のお誕生日を祝って7月に続けてこられたコンサートに加えて、今年はヴァイオリン(篠崎功子、高橋直子)、オーボエ(井上卓也)、チェロ(村上陽一郎)、ピアノ(三浦みどり、今泉真知子、井本かおり)の方々による室内楽も演奏され、12人の声楽のお弟子さん、20数人の「讃美歌の集い」の皆様にも囲まれて、盛大な会となりました。

まだまだお美しく、明かるいソプラノの横河様はご自身も、小川京子様とのピアノ伴奏で、シューベルト「鱒」、バッハ=グノー「アヴェ・マリア」、そして早くに天逝された兄上様の少年時代の作詩、山田耕筰作曲の「笛」を、また閉会には自らのピアノ伴奏によりブラームスの「子守歌」を歌われ、16時から、間に夕食をはさんで20時に及んだ会のあいだ、始終にこやかに、遠来の方々も多いお客をもてなされました。ただ参列しただけの私でさえも、翌日は一日からだを休めなければならなかったほどでしたから、この日の主役の重荷はいかばかりだったことでしょう。

横河電機の社長として活躍してこられた御夫君の正三氏(お父上が創業者)は、現在体調を崩されてご療養中ですが、毎年の「マリの会」にも必ず出席なさり、今回もやはりお出でくださって、会の中心役を果たされました。この会社が、社員との結びつきを大事にすることは世に知られていて、横河様ご夫妻の、暖かい人間関係は、あらゆる分野に及んでいます。

東京バッハ合唱団にも、ある時期に参加されましたが、ご自身の音楽活動も活発に続けられ、社長夫人としてのお仕事も並大抵のことではないでしょう。そんな中を、こまかいお気遣いで、たびたびお手紙で私を励まされ、定期演奏会にご来聴くださり、昨年合唱団創立40周年祝会には、ご参加いただいて歌をお献げくださいました。

私も、都内や箱根のホテルでのコンサートなど、横河様のたゆみない音楽活動に、できるだけ参加させていただきました。そして、大いに学ばせられたことの第一は、きびしい修練によって得られる高度の音楽も、人々と分かち合う段階では、あくまでも楽しくらかなものでなければならない、ということです。

横河様の音楽のつどいには、いつも夢があり、春の日差しのような、心地よさ、和やかさ、うるおいがあります。

いま、世界中には、理不尽にも国を追われ、家を追われて仮の生活の日々を強いられる、おびたしい人々がいます。そこには、一つ所に腰を据えて、安定した人間関係を結べるようなものは、いつまでも実りえないまま、不満と怨念を次々に引き継いでゆくしかないのでしょう。

それを思うと、敗戦後、この国の経済の立て直しに真っ向から取り組まれた横河正三氏、そして御夫君を支えながらも、音楽を中心に豊かな文化活動を展開してこられたマリ子様には、この国の平和の維持に、共に大きく貢献され、それがまた世の平和あってこそのご成功でもあったのだと、つくづく思います。

先月号の、シュッツ合唱団の淡野弓子様との対談でも、痛感されたことですが、音楽活動を何十年と続ける意志は、やはり、同じ地点に根をおろして、信念を貫き通すという、平和志向が強くなければ存立しえないものです。私たちはこういう営みを改めて注目しなおして、平和国家、文化国家はこのような個人個人によって担われ、受け継がれてゆくことを、心に深く銘じたいものと思います。

これからも、ひきつづき力強くお働きが展開されますことを、そして周囲の方々にしっかりと伝えられてゆきますことを、心より願っております。

この日の記念に、横河マリ様がリサイタルで歌われた時の「シューマン・アーベント」(ピアノ：三浦洋一氏、1959年)のCDを携えて帰りました。

私はアメリカのイラク侵略に なぜ反対し闘うか - (連載 3)

森井 眞(団友)

筆者：歴史家(フランス宗教改革史専攻) 元明治学院大学学長。
報復戦争に反対する会主催第1回ピーストーク(2003年3月13日)にての講演記録を同会機関紙より転載。

(3) 絶対に奪われてはならない人間の尊厳

九死に一生というのは少し大げさかもしれませんが、でも本当に幸運が重なって、私は生きて帰られた。再び帰られたときの、また人生を始め直せるというこの

感動。これは本当に大きなものでした。そしてその感動を1日も早く共に味わいたいと思ったのが、旧制高校の3年間、私と寮生活を共にした3人の友達なのです。

私が入りました旧制高校は東京にあったんですけども全寮制を敷いておりまして、3年間東京在住の者も全部寮生活を強いられました。それまで受験勉強に明け暮れて、ろくろく本も読めない、ものを考えることもできない、そういう生活から解放されて、狂ったようにいろいろな本を読みました。そして人間についていろいろな問題を真剣に考えた。その営みを一緒にしたのがその3人の友達だったのです。ほとんど常に私を含めて4人でしばしば夜を徹して語り合い論じ合い、一緒に街を歩き回り、そして一緒に映画を見、芝居を見、一緒に旅をしました。一緒にいないことがおかしいと思えるほどまで、とことんつきあったのです。

友達というのはこの歳になっても新しくできるんですよね。それはとても嬉しいことなんですけども、人生に1回だけの青春時代につくられた、ああいう友達というのはできない。本当にかげがえのない友人でした。私はあの連中と夢を分かち合い、問題を一緒に問い合い、私たちはその問題を問いながら4人ともそれぞれ別の分野に入って行くわけです。

彼らに1日も早く会いたい。そしてまた生きられるこの感動を分かち合いたいと思ったんです。しかし当たってみたら3人とも戦死してしまいました。……だらしななんですけども、もう何十年も前のことだけど、今思い出しても胸がいっぱいになって言葉に詰まるんです。

ひとりは海軍の飛行機乗りになりまして内地で飛行機が墜ちて即死しました。ひとりは兵隊で南方に送られる途中で輸送船がアメリカの空襲にあいまして南方洋上で海の藻屑です。彼がいちばん親しい友達でした。もうひとりは南の島の陣地に配置されて、あるとき圧倒的に優勢なアメリカ軍が押し寄せてきて瞬く間に兵器・弾薬が失われ、島の中を逃げ回ったらしいんですけど、傷つき病み食い物もなくなり、もう実に惨めな状態で野垂れ死にしたということです。

3人とも実に優秀な志の高い奴でした。私は西洋史学科に入りましたが、その3人は、ひとりは美学・美術史、ひとりは哲学、ひとりは仏文科に行きました。そして共に問題を問いつづけ夢を抱きつづけて、これからその問題を自分の分野で問おうとしていたその人生を奪われたのです。彼らは絶対に奪われてはならないものを奪われたのです。どんなに無念だったことか。彼らの叫びが今でも私にははっきり聞こえる。「ちくしょう、悔しい、俺の人生を返せ」、「俺は絶対に許さないぞ」。彼らの怒りの顔がはっきり見えるのです。1

人だけ生き残った私は、口が無いあの3人に代わって、
生きている限り、戦争絶対反対.....。

私は、彼らを失ったことを通して、絶対に奪われてはならない人間の尊厳ということに目覚めたように思います。人間というのはそれぞれに他の誰にも代えられない自分の人生を生きている。人種や国籍の違いを超えて、性の違いを超え、どんな障害があろうが無かろうが、それぞれに誰とも代えられない貴重な人生を生きている。絶対に奪われてはならない尊厳を生きている。もちろん人間はとても脆いものから、必ず死が訪れます。自然現象としての死というのは、どんなに辛くても悲しくてもそれを受け入れなければならない。でも、人間は、はかなくて脆いからこそ、不条理にその尊厳を奪われることは、これは許してはならないんです。

戦争というものはあらゆる意味で人間が人間であることを許さない営みです。戦争というのは人間と人間が殺すか殺されるかの関係に人間をおく。相手を殺さなければこちらが殺されますから、辛いけど目をつぶって相手を殺す。それで終わらないのが戦争で、相手を殺したならばさらに次を殺さなければならない。たくさん殺せば殺すほど誉められる。きりもなく殺しつづけなければならない。これが戦争なのです。

今のアメリカのように圧倒的な武力を持っていれば一方的に殺しつづけることができる。だが普通の戦争はそうはいかない。戦争というのは、他人事ではなくて、「私が人を殺すか、私が殺されるか」ということなのです。外で起こっているのではない。きちんと想像力を働かせて考えないと、戦争はなにか他人事のように外で起こっているものと誤解してしまう。

また「教え子を再び戦場に送るな」と言いますがけれども、今や戦争には前線と銃後の区別はなくなりました。前線に送らなければ、自分は関係ないかといえそうじゃない。戦争が起こったら、それは自分の外で起こっているのではない。イラクでもアフガニスタンでもパレスチナでもそうです。前線にまで行かなければ人を殺す機会はないのですけれども、ひとたび戦争が起こったならば、殺される機会はどこに居ようがある。自分自身に迫ってくるんです。もし仮に自分が殺されなくとも、人間が殺されるのだということ。そういう問題だということをお忘れはならない。だから戦争は絶対に許してはならないのだと、私は思います。

そして戦争は生命を奪うだけではありません。命令に従って行われるのです。すべての人間が自分でものを考え、自分で行動する、その自由を奪います。自由を奪われるということが人間にとってどれほど辛い致命的なことであるか。私が軍隊で学んだ一番大きなことです。

あの3人の友人たちの死。3人の命を奪った戦争。

私は許せない。絶対に許せない。

彼らの死をとおして私は人間の尊厳について目覚めたように思いました。そしておそらく他者の尊厳への自覚ということと、自分の尊厳の自覚というのは、これは相関関係にあるんだと思います。私はあの3人の死を通して彼らの尊厳に目覚めたと同時に、彼らと共に生きた私自身の尊厳に気づいたように思います。そして自分の尊厳に目覚めた者は、他者のそれぞれの尊厳というものに鈍感でなくなるのだと思います。イラクの人であろうが、朝鮮の人であろうが、一人ひとりの人間の尊厳を奪ってはならないのです。(つづく)



バッハ・カンタータ 50 曲選 出版ニュース No.15

[CD] 第2期発行予定と予約受付のご案内

CD選集「日本語演奏によるバッハ・カンタータ 50 曲選」第2期(CD4枚、全10曲)は、明2004年3月の発行を予定して制作を進めています。内容は以下のとおり。

[第1巻] BWV 1, BWV 4, BWV 6

[第3巻] BWV21, BWV26

[第4巻] BWV29, BWV30

[第7巻] BWV45, BWV47, BWV56

(下線の4曲は、本年5月定演でのライブ録音)

第1期発行と同じく、各巻とも定価2415円、第2期全4巻セット、特価9030円(いずれも税込、送料別)です。

なお、発行部数に限りがありますので、まだお申込みでない方は、お早めにご予約ください。

[楽譜]は、いよいよ来夏に完結!!

2000年から毎年10曲ずつのペースで出版をつづけてきたブライトコプフ版楽譜50曲選は、来年8月ごろ予定の第5期発行をもって、いよいよ全巻完結となります。

最終の10曲は、2005年から06年のシーズンの上演曲目となるものです。詳細は後日をお待ちください。